

『ザ・フィフティーズ 第1部・2部・3部』 『アメリカ新上流階級ボボズ・ニューリッチたちの優雅な生き方』

デイヴィッド・ハルバースタム/金子宣子訳 新潮社 OH
文庫 2002年 第1部 981円＋税 2部・3部 886円＋税

デイビッド・ブルックス/セビル楓訳
光文社 2002年 1800円＋税

ラララ・ラララ・アメリカ…

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

小学生の頃から青年期にかけて、私にとってアメリカは憧れの対象であった。小学生時代に見た総天然色（と昔はいわれたのだ）映画をはじめとして、テレビのホーム・ドラマに出てくる夫婦、親子の親密性、明るさ、文化的な生活、そして西部劇が演じられる牧場、土地の広大さ、すべてが夢のように思えた。戦後日本の歴代の総理大臣は言えないが、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ…アメリカの大統領は全部覚えている。アメリカは常に世界の指導者としての座を占めていた。

しかし、日本が高度経済成長をとげ、私たち庶民もそこそこの文化的生活を送ることができるようになって、私のアメリカに対する憧れは次第に薄れ、日本という国、あるいは日本人そのものについて考えることが多くなった。同時に、アメリカの影の部分も見え始め、傲慢さが鼻につくようになってきた。ことに、昨年9月11日以降の迷走ぶりには首を傾げてしまう。良くも悪くも、日本はアメリカの影響を強く受けざるを得ない国だ。アメリカは一体これからどうなっていくのだろう。そんな思いでいたときに出会ったのがこの2冊だ。

まず、『ザ・フィフティーズ』。第1部の帯には「9.11テロ後のアメリカはどこへ行くのか？それを“考えるヒント”は50年代にある」と書かれている。「50年代は、社会的な衝突などとは無縁の折り目正しい時代だったように見える」しかし「その平穏な地表の真下では、社会変動のパン種が徐々に発酵しはじめていた」とい

う。50年代のアメリカは赤狩り旋風で幕を開けた。CIAの暗躍、他国の親ソ政権をクーデターで倒すという秘密工作。一般大衆は豊かな生活を満喫していたとはいえ、「反逆者」のイメージをもつマーロン・ブランドやジェームス・ディーン、エルビス・プレスリーは若者たちの絶大な支持を得、世代間の対立は顕在化し、続く60年代の反体制運動へとつながっていく。黒人たちの公民権運動が高まり、キューバ危機が忍び寄る中で50年代は幕を閉じるのである。

時代は一気に現代に移る。『ボボズ』は題名通り、現代アメリカ上流階級の生活を紹介したものだ。ボボズとは、ブルジョア・ボヘミアンの頭文字である。60年代管理社会に反旗を翻して挫折したヒッピー（ボヘミアン）が、80年代にヤッピーとなり、かつては攻撃対象であった管理社会に入り込み、双方の文化を融合させ、独自のライフスタイルを作り上げた。現代アメリカの「社会の枠組みを作っているのはBOBOである」。彼らの生活はある意味で嫌味だ。ブランド物の靴は買わず、最高品質のトレッキングシューズを買う。自由を尊び責任をとらない。しかし「国内の改革とは、我々が誇りに思うことができなくなっている組織や習慣を改善することだ。（中略）だが、アメリカ人が再び公共生活に関心を持ち、公共の組織を誇りに思うようになるためには、BOBOたち（中略）がリーダーとしての役割を受け入れることだ」という自らもBOBOであることを自認する作者のきわめて誠実な姿勢に微かな希望の光を見た。 ▲



さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ…。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374